

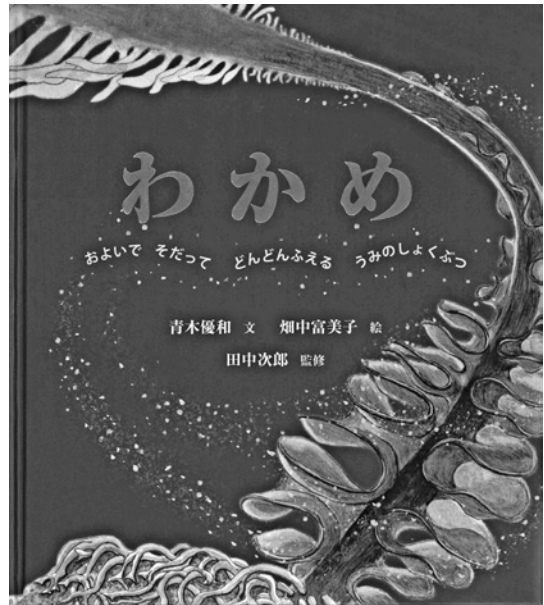
□青木 優和 (文), 畑中富美子 (絵), 田中次郎 (監修): わかめ およいで そだって どんどんふえる うみのしょくぶつ A4変形判, 上製. 42 pp. 2020. 仮説社. ¥1,800 + 税. ISBN 978-4-7735-0305-0.

本書は「子どもと楽しむ. 子どもと考える. 科学えほん」で, 海にすむ「なんじゃこりゃ!」な生き物たちを紹介する「海のナンジャコリャーズ」シリーズ第二弾, と出版社のパンフレットにある. 確かに味噌汁の中のワカメを初めて食べた時は見た目も食感もなんじゃこりゃと誰も思うに違いない. 乾燥ワカメがお湯の中で見る間に大きくなっていくのも不思議だ. 本書は二部構成になっており, 主たる絵本の部分で, 味噌汁の中のワカメがどんな生き物で, 海の中でどうやって成長し, 増えていくのか, そして私たち日本人がどう利用してきたかが説明される. そして, 最初と最後にある「ふろく」の部分で, ワカメにまつわる多種多様な情報が提供される. 例えば, 『①「わかめ」料理いろいろ』にある「くきわかめの佃煮」を読めば早速作ってみたいくなるだろう. 『④「わかめ」を観察してみよう』では, 実物を使っただけの観察の仕方を紹介している. 生のワカメを手に入れて, これまで知らなかったワカメの姿を見てもおもしろい. また, 『⑥「わかめ」の色と光のかんけい』では, 緑藻, 紅藻, 褐藻が持つ色素と生えている海の深さとの関係が一目でわかり, 読者は合点が行くに違いない.

「ゆうそうし」や「はいぐうたい」が出てくる絵本は珍しい. しかし, やさしい絵とストーリーが難しそうな内容を十分にカバーしている. ただ, 「ほろしたい」も当然出てくると思いきや, 出てこない. 片手落ちのようだが, きっと制作段階で議論があったに違いない. 身近な存在でありながら本当はよく知らないワカメという生き物を楽しく学ぶことのできる作品である. 食事の時のネタの一つとして使えるのも嬉しい.

新型コロナウイルス感染症による外出自粛の中, 絵本が人気と言う. 自宅で親が子に絵本を読むことが増えているそうだ. 絵本は子供にとって知らない世界に触れる最初の機会でもある. ただ, 複雑な世界をそのまま見せても子供は理解できないので, 絵本は絵も文もわかりやすいものでなければならず, そこが作者の腕の見せ所になる.

科学絵本の特徴は, 辞典や図鑑との違いでもあ



るのだが, 内容にストーリー性を持たせねばならないことである. 本書では食卓の味噌汁のワカメへの疑問に始まり, それが生えている海の底へ向かい, ワカメの一生をたどる. 普通ならばここで自分が食べているものの実体がわかり, 納得して完了になる. しかし, 本書ではさらに, 日本人との歴史的関わりを紹介し, 現在の養殖法を解説し, 多くの人の手により製品となって最初の食卓へ戻るように展開されていく. 生物としてのワカメだけでなく, ワカメに関わる人間の営みを紹介したい作者たちの意図がよくわかる. 本書は科学絵本として成功していると思う. 特にその構成は良く練られており, 食材を扱う科学絵本のあり方を確立したと言っても過言ではないだろう.

なお, 本書を読んで海藻に興味をもった方には次の書籍を薦めたい. 日本藻類学会 (編) による「海藻の疑問 50」(成山堂書店, ISBN978-4-425-83061-9) である. 藻類研究者 18 名が 50 の疑問に答えている. 例えば, ワカメやコンブをお湯に入れると緑色になるのはなぜ?, コンブのだしはなぜ海中では溶け出さないの?, 海藻の名前にみられる「ノリ」とか「メ」とはなんですか? などが, まさに普段感じている疑問である. いずれもその分野の専門家が平易な文章でわかりやすく説明している.

(樋口正信 Masanobu HIGUCHI)